

多文化共生と
日本人

日本人の宗教とのかかわり

9ゼミ 3102

1.序論

グローバル化が進み、外国人旅行者や労働者がこれからも増加する傾向にあると言われている日本において、外国人と接することなく生活を送ることは不可能といえるでしょう。そのような現状を踏まえて私が研究したテーマは、「日本人は宗教とどのようにかかわり、どう生きていくべきなのか」です。

現代は科学の発展と個人の権利の広がりなどによって、従来の宗教を信仰しているという人は減少傾向にあると言われています。

しかし、文化庁の調査によると、日本人のほとんどは仏教または神道を信仰しています。これは、先祖から引き継ぎ続けているため、本人が意識していない場合も多く含まれていると思われます。そのため、自分の信仰はよくわからないが、代々仏教だからそうなのだろうといった曖昧な認識で信仰していたり、形の上でのみ信仰しているという事例は多く存在します。

文化庁 宗教統計調査 平成 29 年度

宗 教 団 体 (宗教法人を含む。)						信者	項目
神社	寺院	教会	布教所	その他	計		
81,158	77,256	31,332	20,845	6,336	216,927	182,266,404	総数 系統
81,067	14	5,152	917	817	87,967	84,739,699	神道系
31	77,206	2,013	1,776	3,649	84,675	87,702,069	仏教系
—	3	7,119	788	708	8,618	1,914,196	キリスト
60	33	17,048	17,364	1,162	35,667	7,910,440	諸教

私はこの、自身の宗教に対する考えが曖昧であったり適当であったりすることは問題であり、自らを理解できていない状態では他者を理解することは不可能だと考えます。

しかし、宗教というものがよくわからないため、理解に至らないという人や、宗教を恐ろしく感じて距離をおいてしまう人がいるということが調査によりわかりました。

そのため私は一度、日本人が考える宗教とはどういったものなのか。そして、世界の宗教との差はどこにあるのか。ということを探ることで、日本人の宗教との関わりを考えました。

2.本論

第一に宗教に対するありがちなイメージとして、俗世から離れて閉ざされているため他者が入り込む余地はない、生活の全てが宗教中心になってしまう、といったものが挙げられます。これらは戦後日本に発生し、社会的に注目を集めることとなった新興宗教が原因です。

それらのイメージとは違い、三大宗教と呼ばれる仏教、キリスト教、イスラム教の在り方を日本人にわかりやすく表現するならば「道徳」と呼ぶのが適しているのではないのでしょうか。

宗教は生活に寄り添って、よりよく生きていくための考え方として長い間存在してきました。そのため、無宗教であると言いきることは、道徳的な信念を特に持っていないと捉えられてしまうことにつながる可能性があります。

日本人の多くは、幼少期から日本独自の道徳を身につけて生きてきたはずですが、その道徳は山本七平が「日本教」と著したように、何かしら一つの宗教によるものではなく、仏教、儒学、和を大切にす日本の精神などが混ざり合い時代を重ねる中で成立したものです。そのため、日本人は自らの宗教を確かな言葉によって表せないまま、思想の基礎となる教えが身についているといえます。このことを各個人が認識することは日本人としてのアイデンティティの確立と、他者の思想、信条を理解する上で重要だといえると考えます。

第二に、西洋のキリスト教、イスラム教等の一神教と日本神道、仏教等の多神教の差が大きいことが、一神教の宗教と関わるときに混乱を生むということがあります。

そもそも「宗教(religion)とは神と人との関係である」と西田幾多郎が述べているような教考え方がもとになっているのは一神教です。ユダヤ教の流れをくむキリスト教とイスラム教は絶対の創造主と我々人間の関係を説いています。一方仏教は個人の輪廻からの解脱を目的としています。また、日本神道の神々は我々に近い自然に宿っているという考えであり、人間との関わり方が一神教とは大きく違ってきます。

宗教と一括りにされていますが基本となる考えも異なっています。しかし、昔から続いている宗教は人としてよく生きる方法を説いているという共通項もあります。そこに多少の差はありますが、宗教の多くは平和と安寧を願って今もあり続けています。偏見をもたずにそれぞれの宗教の考えを学ぶことで、恐れずにより関係を築くことができると思いますが。

第三に日本古来のムラ社会的な「和」が、外の文化との溝を作っているという考えがあります。郷に入っては郷に従えということわざがあるように、日本には集団を重要視する考えが強く根付いてきました。しかし、近代化が進み、個人の自由が尊重されてきているため、この問題の解決は近いと思われます。集団の為に個人を規制するのではなく、集団を構成する個人を尊重し、上手く協力し合う「和の心」を各々が持つことが重要です。

3.結論

物質的な価値が重要視される世の中ですが、多くの宗教が説く「道徳」なしではよく生きることはいけません。そのため、誰もが精神の軸となる宗教をもって生きていくべきだと私は考えます。

しかし、日本では信教の自由が認められているように、宗教との関わり方には個人の自由が保証されており、他者である私が口出しすることはできないというのが基本にあり、具体的な解決策を提案することはできません。しかし、今まで無意識下にあったことを意識させるきっかけになることはできます。世界と関わる時にこそ、自分の土台となっている思想を認識することは重要であると言えるでしょう。もちろんすべてを正しく認識するのは難しいことですが、他者への理解を深めていくためにも、自己理解を深め、そこから寛容な姿勢でもって他者への理解へと繋げていけたらよいのではと思います。

※参考文献

西田幾多郎(1911)『善の研究』

和辻哲郎(1935)『風土』

山本七平(1970)『日本人とユダヤ人』

政府統計の総合窓口/宗教統計調査

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00401101&tstat=0000010184>

71

将来に向けた「隣国」韓国との付き合いについて

3228

0. 要旨

近頃、韓国国内で日本に対する嫌悪感が高まっているというようなニュースを見かける。実際に日本、韓国ともに互いに対する印象が悪いということを裏付けるデータも存在している。

しかし、そんな状況の中、日本で韓国の文化が流行するという嫌韓の対極にあるようなことが起きている。なぜそのようなことが起きるのか。私は、「現代の韓国人は日本という国そのものを嫌っているわけではない」からだと考える。

この奇妙な矛盾の背景にあると思われるのは、近現代の日本が韓国に対して行った非道な行為である。今でもその爪痕は根深く残っていて、従軍慰安婦像等がその爪痕の最たる例と言える。また韓国国内での情報公開の内容や、そもそもの国民性の違いなどから、相手国の行動が理解できないものになっていることもある。

一方、日本で韓国ドラマがヒットしたことによって日本国内での韓国文化へのハードルが一気に下がり、韓国へのポジティブな関心が増えてきているのもまた事実である。

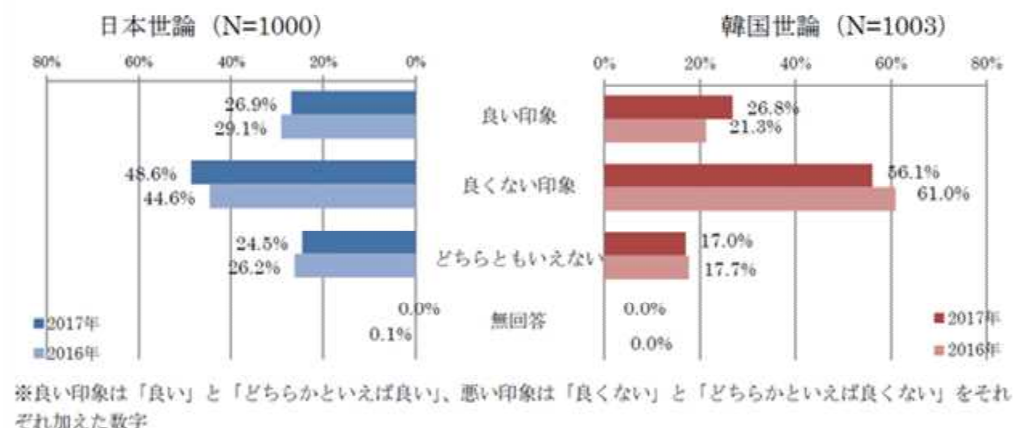
それに加え、日本、韓国の両国が情報源として最も使っているのがニュースメディアである。どちらの国もかなりニュースメディアに依存している傾向が見られた。

1. 序論

ここ数年、テレビのニュースや新聞で、「従軍慰安婦像の設置」「日韓合意の取り消し」といった韓国との間の問題について多く見かけるようになってきた。

言論 NPO が行った日韓共同世論調査によると、相手国に対する印象を「良くない」「どちらかといえば良くない」と回答した人の割合は、日本が 48.6%、韓国が 56.1%と、半数近くになっている。このことから、日韓関係が冷え込んでいることが分かる。

【図表1 相手国に対する印象】



出典：www.genron-npo.net/world/archives/6677.html

しかし、ドラマや音楽、食べ物のような韓国の文化が日本で積極的に受け入れられてきているのもまた事実である。CDセールスランキングで韓国人アーティストの名前を聞くことは

珍しいものではなく、新大久保はコリアンタウンと呼ばれるように、韓国風の店が立ち並んでいる。

これらのことから、現在の日本は韓国に対する相反する感情が同居する奇妙な状況であると言える。

韓国に対する好感と悪感情が同居する状況になっている理由について、私は「韓国が『反日国』と言われるのは過去に焦点を当てた場合で、現在は国家そのものが嫌いということではないのではないか」と考えた。

2. 本論

韓国が反日感情を持つに至った原因としていくつかの出来事が挙げられるが、その中でも特に大きな影響を与えたのは韓国併合ではないだろうか。

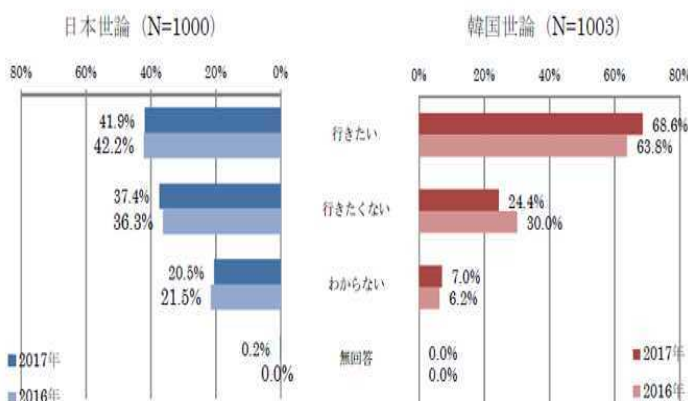
日本的な文化の強要など、日本が韓国の主権を握って統治したことにより、韓国国内から大小さまざまな不満が出ていると言われていたが、正確な統計や記録かどうかは確かではないものも多い。

また、日韓基本条約の際に韓国が日本に対する請求権を放棄したことが韓国国内で2009年に情報公開されるまで、韓国の人々は戦争に対する補償が十分ではないと思っていた可能性が高い。その状態では、当然のことだが賠償金を支払おうとしない日本の姿勢は韓国人の目には不誠実なものに映ったかもしれない。

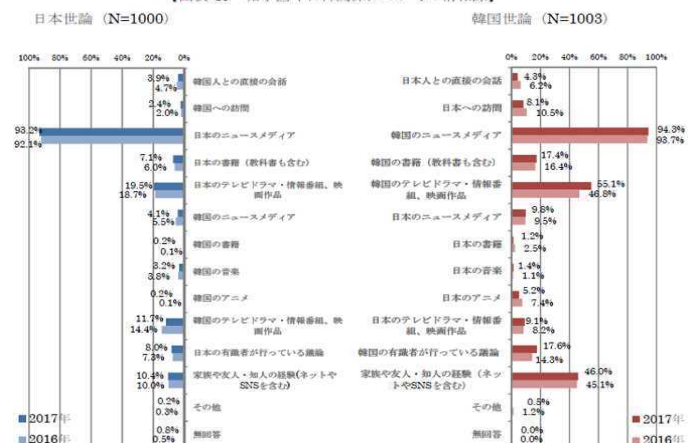
一方、2000年代に入ってから、韓流ドラマの大ブーム等の影響により、互いの国を行き来する人の数は増加している。2017年の日韓共同世論調査による相手国へ行きたいかどうかの調査では、行きたいと答えた人が日本は41.9%、韓国は68.9%となっている。わざわざ嫌いな国へ行きたがる人はいないと言っても過言ではないだろう。つまり、少なくともこの調査で「行きたい」と答えた人は、相手国に対して好感を持っていることが分かる。

また、これらの情報源についての調査によると、両国ともに圧倒的多数を占めているのが自国のニュースメディアだということが分かる。それと比較すると、直接の会話や相手国への訪問といった「自分で体験する」方法での情報を得ている人の割合はとても少ない。

【図表14 相手国へ行きたいか】



【図表13 相手国や日韓関係についての情報源】



出典：www.genron-npo.net/world/archives/6677.html

3. 結論

過去の出来事からも、反日感情が生まれるのは妥当で、いまだに反日感情があるのも納得

できる。

かつての日本がしたことはそれだけ非道なことであり、その補償が必要だということは日本人自身もよく理解している。だが、日本人と韓国人との間の認識の差が誤解を生み、その誤解がまた更に悪印象につながるといった負のループに陥っているのではないだろうか。

そして、この負のループは、全て「昔の出来事」に起因している。逆に、近年になって出てきた文化に触れる際、一々「昔の出来事」に絡めて批判的に考える人はごく稀であり、「過去のいざこざ」という背景のない状態での文化交流は概ね平穏に進んできていると私は考える。

これらのことから、「韓国が『反日国』と言われるのは過去に焦点を当てた場合で、現在は国家そのものが嫌いということではないのではないか」という仮定は、大筋はあっているとと言えるだろう。しかし、「国家そのものが嫌いではない」というよりはむしろ「悪いところばかりクローズアップされるため、想像以上に嫌われていると思込んでいる」という可能性が高いだろう。情報源についての調査からも、少ない情報源から印象を決定してしまっていることが読み取れる。これは、それこそメディアで取り上げられないのが疑問なくらいに危機的な状況であるように思える。

与えられた情報を疑うことなく鵜呑みにすることは、思考停止、ひいてはいいように操られることにもつながりかねない。韓国からもたらされる有益なものでさえ、韓国に対する色眼鏡のせいで拒否してしまうのは、とてももったいないことである。

このようなことを防ぐには、私たち自身がしっかりと韓国について考えることが必要だと私は考える。さまざまな方法でもたらされる情報に踊らされることなく、正しい情報なのかどうかを吟味して、「本当の韓国」を見ていくことが、これからの日韓関係で一番求められていくのではないだろうか。

また、直接交流する機会がほとんどないのも誤解を増やす一助になっていると思われる。ここ数年の技術の進歩により、コンタクトを取る方法も、実際に訪問することの敷居も下がってきている。可能であれば実際に話してみることがベストな方法だろう。その他にも、韓国人と交流を持つ方法は思いの外多かったりする。今日、様々な SNS で同じ趣味を持つ人が国籍を超えてつながっていたり、互いに自分の言語を教えあったりするなどの交流が行われている。そのようなものに一度触れてみると、今まで知らなかった韓国の一面に出会えるかもしれない。

4. 参考文献

言論 NPO (2017) 「第 5 回日韓共同世論調査 日韓世論比較結果 | 言論外交の挑戦」

www.genron-npo.net/world/archives/6677.html (参照 2018-6-13)

呉善花 (2012) 『韓国併合への道 完全版』文芸春秋<文春新書 870>

東郷和彦 (2013) 『歴史認識を問い直す一靖国、慰安婦、領土問題』角川書店

「多文化共生を目指して」
～他宗教に関する認識、理解不足について～

9ゼミA班 3337

研究要綱

グローバルな社会へと変化していく世界の中で取り残されないためには、日本も今より世界との距離をつめる必要がある。そのときに、日本にとって最も世界と壁を感じるのは、宗教に関する知識と感覚だと私は思う。そこでまず、他国の宗教理解から考えていこうと思う。

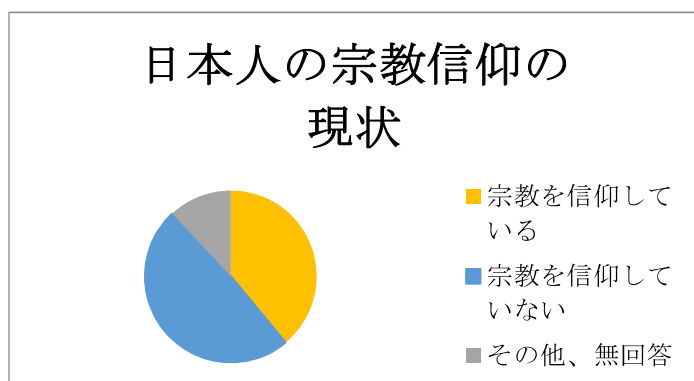
日本人の日常生活には、少なからず宗教に関する事柄が溶け込んでいる。「いただきます」や「ごちそうさま」は、日本人ならば毎日毎回当然のことに言うが、世界中どこでも言っているというわけではなく、キリスト教信者の中でも熱心な人はお祈りを挙げるが、今はほとんどいない。手を合わせて感謝の気持ちを表す行為は、一種の祈りのようにも見える。日本人は、無意識ながらも「祈り」という宗教染みたことをしているのだ。

日本人にとって宗教が馴染みづらいものになっている一つの原因として小さいころから「宗教」というものに触れていないということがあげられると思う。例えば、キリスト教圏の国は、生まれたとき、成長していく過程で見えるものに宗教が絡んでいることがあると思われる。親に連れられて礼拝に行く経験が、無意識下のうちに宗教という存在を身近にさせているのではないだろうか。ということは、日本でも幼稚園や保育園などの小さい頃を過ごす場所でキリスト教やイスラム教、仏教などの行事を本格的に取り入れることで宗教に対して距離を感じることや、知識がないままグローバルな社会に飛び込んでいき、世界と壁を感じることもなくなるのではないだろうか。

本論

まず、日本人にとって宗教とはどのような立場にあるのか。私は、日常生活を過ごしていくにあたって無意識ながらも必要不可欠なものだと思う。例えば、お墓参りや初詣、クリスマスなど、今を生きている私達にとっては当たり前であるが、それらはほとんど宗教に関係したことである。しかし、日本人は無宗教であり、宗教に関心がない人が多いのではないか。そこで日本人の宗教に対する認識を調べた。まず、宗教を信仰しているかどうかを調べてみた。『宗教への信仰については、「宗教を信仰している」人が 39%に対して、「宗教を信仰していない」人は 49%で、宗教を信仰していない人のほうが多くなりました。』

図 1



“宗教的なもの” にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査（宗教）から～

上のグラフを見てわかるように、日本人は宗教を信仰していない人が多い。また、『宗教的な行動では、「墓参り」や「初もうで」を「よくする」という人が半数を超え、「したことがある」を加えると9割程度の人が行っていることがわかりました。「お守りやおふだをもらう」や「おみくじをひく」については、2人に1人が「したことがある」と答えています。』これらの結果から、私たち日本人は無意識のうちに宗教に関することを行っているのだ。

宗教は危ないのか。今現在、宗教が争いの原因になっていると多くの人を感じているだろう。特にイスラーム過激派が相当の影響を持って、テロと結びついて暴力を増幅するような結果をもたらしている。日本でも、オウム真理教の事件（坂本弁護士一家殺害事件、松本サリン事件など）があった。オウム教の人たちは自分の事を仏教徒だと自称しているが、国の体制をひっくり返すようなことを計画し、人を傷つけることをした時点でそれは、宗教ではなくただの人間の行き過ぎた考えなのだ。そもそも宗教とは、戦争を肯定する思想ではなく、どちらかといえば「墨家」の祖・墨子が「非戦」を唱えたように、できる限り人と人との争いを回避しようとするような思想なのだ。だが、最近テロと宗教が結びつくことが目立ってきており、「宗教＝暴力的」というイメージが人々にしみついてしまっている。

グローバル化していく世界では、正しい知識と自分とは違うものを受け入れ、理解していく心が大切になっていく。今まで日本人の中で宗教に対する認識が低かったのは、正しい知識を取り入れる場所がなかったためだと思う。よって、宗教に触れる機会をつくる。すると、宗教を遠いものとしてみなくなる。これらのことで、日本人の認識と知識を正しいものにすることができる。具体的には、保育園や幼稚園などで年中行事として本格的な

キリスト、イスラム、仏教の行事を入れる。(ex.キリスト教のイースターetc...) 外国の生活には宗教が馴染んでいる。なので、外国で年中行事とされているものを積極的に取り入れることで宗教に対する抵抗がなくなると思う。

まとめ

今まで日本人は、ほかの国に比べて宗教に触れる機会が少なかった。そこで、まだ考えが偏っていない小さい子供に対して、保育園や幼稚園で行事として行うことで親しみを感じてもらおうと宗教に対して壁や距離を感じるがなくなると思う。今を生きている私たちも宗教を信仰している人たちと共存していくために、理解する努力を怠ってはいけないのだ。少しずつでも、一部だけでもわかろうとすることが大切だと思う。

参考文献

“宗教的なもの” にひかれる日本人

<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/032.html>

“宗教的なもの” にひかれる日本人

～ISSP 国際比較調査（宗教）から～

https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_05/090505.pdf

平凡社 宗教って何だろう？ 島菌進

昨今のグローバル化が促進される環境下で、グローバル化において大切なこととして、語学的な共生を重視されることが多いが、宗教や生活、習慣などの文化的な側面はあまり注視されることはない、そこで、文化の中でも、とくに宗教を中心とし、なぜ語学よりも文化が注視されない状況にあるのかを調査した。

「仏教国であるのにそもそも、自国の文化にさえ興味が向かず、知識不足であるのはなぜか」という考えを主軸とし、私たちが影響を及ぼす原因とは考えられない「間接的原因」と、私たちのちからで状況を変えていくことができると考えられる「直接的原因」について考察し、その仮説に基づく調査を経て実際に必要とされる行動は何であるかを研究した。

一年次のフィールドワークの活動を通し宗教をどれくらい身近に感じているのかを調査した。結果としては、テレビなどで情報を目にしないことはないが、身近に実際に宗教に関わる人(キリスト教などのあまり日常では目にしない宗教や住職の方など)がいないと宗教がちかくにあるという実感は湧かないというものであった。

「仏教国であるのにそもそも、自国の文化にさえ興味が向かず、知識不足であるのはなぜか」日本が「異文化の受け入れに柔軟で寛容である」となれば「取り込まれた文化を理解し、受け入れること」が行えるのではないだろうか。まず現状に至った原因として

間接的原因

I 小さいころから自国の主教文化に触れる機会が少ないためではないか

直接的原因

II 文化が重要視されないため(語学を重要視しがち)

という仮定があげられた。この過程について調査を進める。

仮定 I 「小さいころから自国の主教文化に触れる機会が少ないためではないか」

日本は他国と違い宗教的概念が少し軽薄であるため、例えば神社と寺を混同しがちであり、クリスマスやハロウィン、近年ではイースターなど、宗教的な催事であったことを本来の意図とは関係なく祭事として一国の文化として取り入れている。この点において日本は異文化について柔軟に対応できていると考えられるが、言い換えると「絶対的な宗教観」が欠如しているのである。

I-ω 「なぜ自国の宗教文化に縛られず寛容であるのか」

日本は主に仏教国とされるので仏教の教えを例に挙げると仏教では「この世に起きることに偶然はない」という考えのもと因果応報であるため先の行いには気を付けるという道徳的である教えが殆どだ。仏教の教えという考えだけにとらわれず、一般的な道徳として通ずるものである。しかし、キリスト教のお祈りやイスラム教の礼拝、そしてヒンドゥー教のもとでは、牛を神の使いとするため虐げてはならないなど、直接私たちの行動や思想を制限するようなことは特に行われず、自由に見聞の域を広めてきた。もちろん教えを一つ一つ詳しく追

っていけば厳しいものもないわけではないがそれを強要しないのもまたひとつの考えである。私たちは行動や思想が縛られないという環境下のもと宗教的観念が育まれてきたので、現代の日本人の文化的に何事にも縛られない国民性そのものが宗教的思想であるとも考えられる。

I-A「日本に宗教文化が残っていないからか」

現代において、イスラム教では礼拝や断食、ヒンドゥー教では牛を神の使いとして崇めるなど現代でも顕著に宗教としての文化が残っている。いずれも敬虔な信者が多い。日本にもこのような宗教文化を代表する文化はないだろうか。私たちは仏教文化により起こったのではないかと考えられるもので「正月」「墓参り」「お盆」を挙げた。まず正月は、年の瀬に神を自宅に招き入れる「神道」としての行事である、また「お盆」は夏に先祖の死者の魂を自宅に招き入れる「神道」としての行事である。「墓参り」においては、仏教は「輪廻転生」死んだのちに生まれ変わる。というシャカの教えがあるため、「仏教」文化ではないとされる。同様の理由で死者の存在を認めることとなる「お盆」も仏教文化とはされないが、文化として私たちに浸透するより先に浸透と仏教の融合文化として起こっていたことが分かった。そしてなにより、これらの行事は文化としてではなく我々の中で「習慣」として続いているのである。しかし、宗教は祖の教えもとに生活をするが我々のなかに、教えの元で起こしていると考えられる行事のこうどうはあるだろうか？ 私たちの中では宗教文化は「宗教文化」としてではなく、日常の中で行われる「習慣」として根付いていることがわかった。

I-B「宗教理解が薄れてきているからか」

宗教理解が薄れてきている、とは自国の文化に目を向けないため、それをもとに他国の文化の尊重をはかれないのではないかと、ということである。これは、先に述べたように、日本では仏教における特徴的な文化がないためではないかと考えられる。また、意識せずとも理解が薄れてきているだけではなく、新興宗教による傷害事件や、宗教をもとに起こった犯罪組織などが大々的に報道されることで、宗教に対するマイナスのイメージが先走ってしまうこともあげられる。このことから、意識せずに宗教理解が薄れることと、嫌悪感から宗教を理解しようとする自体がなくなってしまう、意識的な宗教理解の薄まりがあるのではないかと考えられる。

仮定Ⅱ文化が重要視されないため(語学を重要視しがち)

グローバル化が促進されることで、日本では英語教育がより促進されるようになった。今では、小学生のころから授業には英語が導入され、2020年には英語は小学校での外国語活動が英語という教科として扱われる方針だ。一方文化面の教育下におけるグローバル化では、国内の国立大学を中心として、食堂にハラールメニューが設置されたり、社会科の教科書に、文化における食事の違いが載っていたりするが、語学と比較すると、文化はあまり重要視されていないのを見てうかがえる。

Ⅱ-A「英語教育の促進」

グローバル化が進むにつれ、近年では特に学問や文化の海外進出が進み、それに伴い英語力、英語学習の影響はグローバル化に寄与していると考えられるが、英語力の低下危惧するためにグローバル化の上で社会的に必要不可欠な能力である英語の教育が強く推し進め

られる現状は事実であり、英語の学習を減らすことで、グローバル化の目が語学力から文化へと目を向けられることはあまり考えられない。

II - B 「身の丈に合わないグローバル化」

大国を発端とするグローバル化に、無理についていこうとするため、表面だけの「グローバル化」にとらわれ、また、グローバル化を求められる人材が、グローバル化の本質を理解せず、表面だけのグローバル化に追い付こうとしているため、文化や習慣、宗教などの、ほかにも必要である要素が取り払われ、言語による統制が最優先に捉えられてしまっているのではないだろうか。

以上のことから、理解不足の改善にはII - Bの考えがもっとも有用ではないか考えた。この考えをもとに、グローバル化を担う若年層の世代が、グローバル化の本質を理解し、多角的にグローバル化に対応していくことが必要である。そのためにはまず、自国、他国の文化、異文化の理解に個人がとめることで、日本ではあまり中止されない宗教も、他国では文化における重要な一端を担う要素であることを理解でき、グローバル化に伴う異文化理解、グローバル化がより深く浸透する一歩になるだろう。

参考資料

- ・日本人が知らない世界と日本の見方 (PHP 文庫) 中西輝政 著
- ・日本経済新聞 外国人純流入、最大 13.6 万人 人手不足で増す存在感
<https://www.nikkei.com/article/DGXLZO15358730V10C17A4EA3000/>